

り壊れてきています。従って、90年代以降の新しい社会と学校との関係の組み替えを考えるためには、社会的レリバンスを有する学力へと、学力観の転換を図る必要があるのではないかと。これが、私たちが考えているカリキュラム・イノベーションの一つの前提的な問題意識です。

そこで、どうやってこのカリキュラム・イノベーションを行っていくのか。一つは、カリキュラムの内容面、教科内容そのものにかかわる内容の組み替えを含む再吟味が問題になります。これについて、この研究では、基幹学習、生き方の学習、そして社会参加の学習という三つのユニットを作って、それぞれ内容を吟味していこうとしています。もう一つは、カリキュラムを実施していくためのシステム、学校づくりや教育行政を含めた改革が必要になってくるので、それについては総括ユニットを設けました。特に本学の場合には教育学部の附属中等教育学校がありますので、ここの連携を図り、同時に、先進的实践校や教育委員会との連携も図りながら、カリキュラム・イノベーションを可能にする学校のガバナンス、学校の経営の仕方、あるいは学校づくり、それから教育行政のあり方などの条件を探っていきたいということです。この二つの柱を両輪としながら、3年後には少し具体的な形で、実践を含めたカリキュラム・イノベーションの方向性を示したいというのが、現在、私たちが取り組んでいる研究の概要です。

本日は、それについての理念と方向性を、佐藤先生、根本先生、下山先生、星加先生からお話しいただき、同時に、附属中等教育学校からも村石先生と福島先生にご報告をいただこうと考えています。本日の話の中で、恐らく議論になるであろう一つのポイントは、カリキュラム・イノベーションの前提として、学校の教員と、学校の教員以外の専門職（スクールカウンセラー、学校図書館にかかわる人たち等）とのコラボレーションをどのように図っていくのかということです。併せて、

カリキュラムの内容が、従来型の下に降ろしていく型から、社会的なレリバンスを有する型に変わっていくことが具体的にどういうイメージで想定されるのかという辺りについても議論が出てくるかと思います。それについては、最後に金森先生と市川先生からコメンテーターという立場で、それぞれの報告を構造化してコメントをしていただき、それも含めて一緒に議論していただければと思います。

研究科長挨拶

市川 伸一

(教育学研究科研究科長・教育心理学コース)

今日はお忙しいところ、たくさんの方に来ていただきまして本当にありがとうございます。今回はかなり大型の科研で、本研究科の教員20名以上が絡んでおります。半分以上が、この科研の中で「社会に生きる学力形成」ということを研究していくということです。これだけ大きなプロジェクトが動いたのは、基礎学力というテーマでの21世紀COE以来ではないかと思います。私たちも、今回のテーマは研究のための研究で終わらせたくない、机上の空論と言われたくないという気持ちで臨んでいます。このようなカリキュラムにしたらいいいのではないかと、単に提案するだけ、あるいは何か実証的な研究をするだけではなく、実践を伴った提案にしていきたいということです。

今日は附属中等教育学校からもお話があります。一つのフィールドはもちろん附属ですが、それ以外の多くの学校、小学校も含めてということです。今日は中学、高校の先生が多いかもしれませんが、今度のカリキュラム・イノベーションは小学校も射程に入っています。小・中・高の学校とも連携しながら実践付きのカリキュラム提案をしたいというのが今回の趣旨です。そのキックオフに当たるようなシンポジウムではありますが、私たちがどのようなことを考えているのかというお話を聞

いていただき、連携できる実践校を増やしていきたいと考えています。今日の1日が充実した討論になることを願っています。

話題提供

カリキュラム・イノベーションとは何か？

「21世紀型の学校カリキュラムの構造」

佐藤 学 (教職開発コース)

ものすごく大きなテーマですが、21世紀型のカリキュラムがどのような問題を抱え、また議論されているのかということをお話したいと思います。上は附属の生徒たち、下はフィンランドの子どもたちの写真です (図1)。



図1

れば市場が均衡に向かっていき、需要と供給のバランスが取れてくることによって市場における利潤が減ってしまう。そうすると資本主義がうまく機能しないので、いわばフラットな状態になった状態から、起業家精神 (アントレプレナーシップ) を持った幾つかの部分的なところがさまざまな革新、刷新を働かせることで資本主義を活性化し、そのまま社会主義に移行するという、極めて楽観的な議論です。そのような中で生まれた言葉です。考えてみると、今言われている起業家教育も、やはりシュムペーターが最初に出した言葉です。現在のグローバリゼーションと、その中における教育の位置ということで背景を考える必要があるのではないかと思います。

イノベーション

- イノベーション (innovation) という用語が、21世紀の経済、経営、技術の標語となっている。
- この言葉のルーツはシュムペーターの経済学 (1912年)、1960年代「技術革新」の意味で広範に使われる。ハーバード大学の経営学のクリステンセンが1990年代に使用。一挙に普及。現代では「企業精神」による部分的革新が、全体のシステムや様式に及ぶ全体的構造的な改革を導くことを意味している。
- 知識基盤社会による教育環境の激変＝大学の企業化、知識と教育の商品化、知識の情報化、科学技術の帝国主義化＝これらの巨大な動きに、学校教育はどう対抗しうるのか。(二つのイノベーションの拮抗)。

図2

イノベーションとは

最近の教育改革は、Educational reformという言葉ももちろん使われますが、Educational innovationとされています (図2)。

今のイノベーションブームが始まったのは1990年代半ばだと思います。もちろん教育だけではなく、政治、経済、社会、文化とさまざまなところでイノベーションがキーワードになってきています。イノベーションという言葉そのものは、シュムペーターの経済学で1912年に登場します。シュムペーターの経済学は、資本主義が高度に発達す

しかし、これが現在のように大きく使われだしたのは、ハーバード大学の経営学のクリステンセンが、ほとんどシュムペーターと同じ用語体系を使ってからです。イノベーションによる新しいテクノロジーの革新というよりも、社会、経済、文化のさまざまなシステムや様式に及ぶような全体的な構造的改革ということです。先ほど小玉先生が、従来の大学と学問あるいは学校が社会とのフラットな関係で、そこにイノベーションが起こっていると指摘になりましたが、まさにそのとおりです。そういう意味での教育のイノベーションが起こっています。